

古典技法を活かした天井画のアーカイブ研究

鷹濱 春奈

(京都芸術大学通信教育部日本画)

1. 研究概要

本研究は、古典技法を活かした天井画の制作を基点とし、さらなる文化的活動への展開とアーカイブの実践を試みたものである。

申請者は東京藝術大学大学院博士後期課程にて『縮図からの想定復元研究-天瑞寺室中旧障壁画「松図」の想定復元制作を通して-』の研究を行っており（平成26年～28年貴財団助成研究）、その中で作品の一次資料や二次資料の重要性を強く実感した。破損、または消失の可能性がある作品に対して、何らかの情報が残っていないとその作品の本来の姿を知ることは困難になってしまう。そのため、記録として残す（アーカイブ化）という行為も文化財の継承において重要であると考えた。

そこで、令和4年～5年に日本画家18名とともに古典技法を活かして制作した阿弥陀寺天井画を、アーカイブ化に関する取り組みの例として研究を行った。制作した作品はお寺の本堂内部に設置されることで初めて天井画として成立するため、記録の在り方においても空間との関係性を損なわないよう配慮する必要があった。作品の図様だけでなく、堂内の雰囲気も重視し、視覚的にも分かりやすくするため「本」という媒体でまとめることとした。図録にすることで制作協力者たちも成果物として発表しやすくなり、美術関係に従事している者だけでなく、一般にも興味関心を持ってもらうことで作品情報を広く周知できると考える。

2. 天井画撮影及び図録制作の工程

- ①図録デザインの打ち合わせ
- ②天井画撮影の打ち合わせ
- ③天井画撮影
- ④図録デザイン、サンプル印刷

①図録デザインの打ち合わせ

まず初めに、デザイン担当者である泉美菜子氏と図録デザインについての打ち合わせを行なった。図録サイズはA4横とし、天井画概要、作品個別画像、配置、制作者略歴

の流れで章立てを行い、天井画の紹介を行う。さらに古典技法を活かして制作していることを示すため、制作工程も合わせて掲載する方針とした。

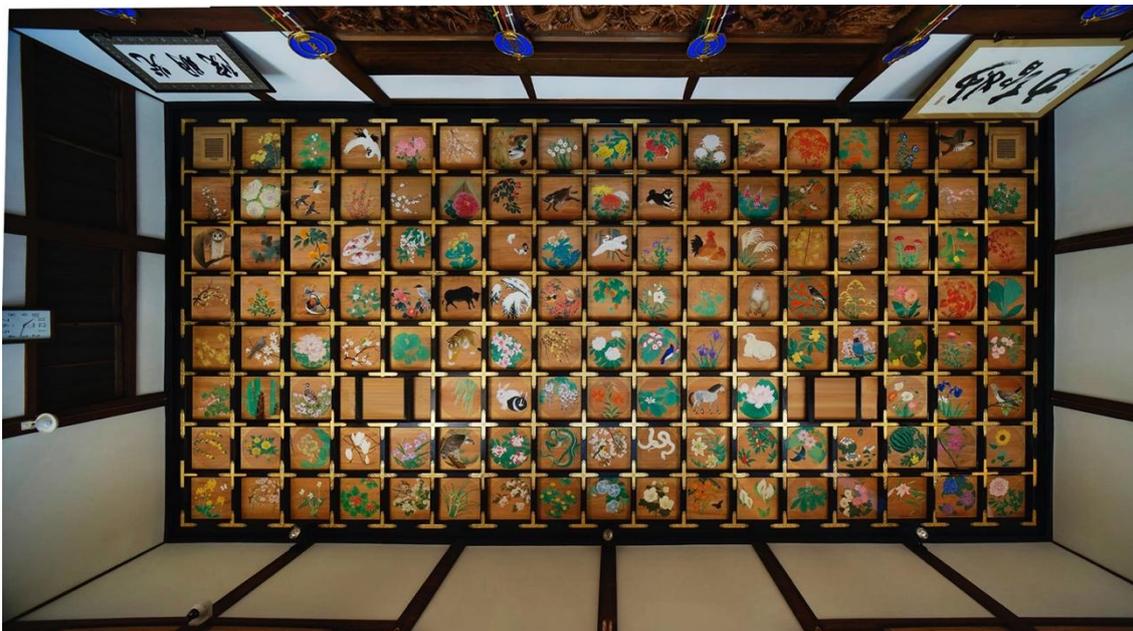
②天井画撮影の打ち合わせ

次に天井画撮影者である興村憲彦氏と打ち合わせを行なった。泉氏との打ち合わせ内容を伝え、必要な撮影日数、人数、床から天井画の高さを考えた際の使用機材、脚立の有無などを中心に話し合った。

③天井画撮影

撮影は2024年8月28日、29日の2日間で行なった。申請者とともに共同研究者である谷津有紀氏、撮影者である興村氏と撮影アシスタント1名、デザイン担当者の泉氏の5名で阿弥陀寺へ伺った。

現地到着後に本堂内部を確認し、照明は使用せず自然光で撮影を行うこととした。天井画全体像は1カットでは収まらないため専用の広角レンズで分割撮影をし、合成を行う。また写り込む柱及び天井から下がっている照明、天蓋は外せないため、写らない角度から数カット撮影し合成を行い、天井画全体像とした。全体像撮影後は泉氏が必要とするカットに基づき天井画部分、本堂外観、内観、申請者と御住職が共に天井画を見ている風景などの撮影を順次行った。撮影後、写真はレタッチャーに渡し、合成や補正を施した。



[図1] 天井画全体像 興村憲彦氏撮影



〔図2〕天井画撮影風景

④ 図録デザイン

写真のレタッチが完了後、図録デザインを泉氏が行った。

まず図録表紙及び裏表紙には天井画全体像が回り込むレイアウトを採用した。これにより、図録を手にとった瞬間に一目でどのような天井画なのかが分かり、作品の存在感と視認性を両立させるデザインとなっている。また、作品がお寺の本堂内部に設置されている特性上、その空間との関係性も重要な要素である。そのため本堂内部の様子、空気感を感じ取れるような写真を多く取り入れ、単なる作品記録にとどまらない空間と作品の一体感を重視した構成とした。さらに、専門性を保ちつつも一般の方にも分かりやすくするため作品写真中心のページ構成とし、全104ページとなっている。デザインが完成したところで仮印刷を行なった。



〔図3〕図録表紙、裏表紙（中心が背表紙）



〔図 4〕 個別作品ページ

制作工程 本実演は楽音絵画における古典技法を活かして制作を行いました。素材に麻紙、墨を用いて作画するため、筆遣や墨として墨色（染み込み）や墨濃度のコントロールが難しいです。サンプルの中でも最も適当と考えられる濃度を使用し、制作工程についても古典作品を基に検討しました。制作工程決定後、画題ごとに担当者を決め、実演時の準備と小下図制作が完了したところで各自作業に移り、各々の持ち場を活かして作画を行いました。



〔図 5〕 制作工程ページ

3. 本印刷について

令和6年度においては天井画撮影、図録デザイン、仮印刷まで行い、次年度以降に本印刷を予定している。印刷に際しては本を開きやすいかがり製本にし、用紙は作品を見やすいよう光を反射しづらいものを使用するなど、図録自体の完成度を高め、幅広い層に興味を持ってもらえるよう工夫を施す。また、アーカイブ化の重要性について研究概要をまとめたものを添付予定である。

4. まとめ

本研究は教育機関や研究機関に所属せず、作家業を基本としている独立した個人による実践的な取り組みである。記録を取ることが困難な作品のアーカイブ化という課題に対して、個人の研究がどのように社会的貢献ができるかを考え、その成果を一般に開かれた形で提示することを目指した。制作の現場から発展させて実践的な課題解決へ取り組んだ本研究の意義は十分にあると考える。今後こうした試みが広がっていくことにも期待したい。